修士論文（要旨）
2020 年 1 月

消防団員の惨事ストレスに関する自己開示と精神的健康の関連

指導　池田　美樹　准教授

心理学研究科
臨床心理学専攻

218J4009

西田　有希

Master's Thesis(Abstract)
January 2020

The Relationship between Self-Disclosure and Mental Health on Critical Incident Stress of volunteer firefighters

Yuki　Nishida
218J4009
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Miki Ikeda

目次

第１章　はじめに 1
1.1 惨事ストレスについて 1
1.1.1　惨事ストレスとは 1
1.1.2　職業救援者の惨事ストレス 1
1.1.3　消防職員への惨事ストレス対策 2
1.2　消防団について 3
1.2.1　消防団とは 3
1.2.2　消防団員と惨事ストレス 3
1.2.3　消防団員への惨事ストレス対策 3
1.3　自己開示について 4
1.3.1　惨事ストレスと自己開示 4
1.3.2　自己開示と職場の雰囲気 5
第２章　本研究の目的と仮説 6
2.1　目的と意義 6
2.2　仮説 6
第３章　方法 7
3.1　調査方法 7
3.2　調査時期 7
3.3　調査対象者 7
3.4　質問紙の構成 7
3.5　倫理的配慮 8
3.6　分析方法 9
第４章　結果 10
4.1　対象者の属性および GHQ 得点について 10
4.1.1　対象者の属性 10
4.1.2　対象者の GHQ 得点 11
4.2　惨事経験の有無および自己開示の有無による精神的健康の差の検討 11
4.2.1　惨事経験の有無による精神的健康の差の検討 11
4.2.2　自己開示の有無による精神的健康の差の検討 12
4.3　属性（階級，所属歴，出動回数，雇用形態）による精神的健康の差の検討 12
4.3.1　階級による精神的健康の差の検討 12
4.3.2　所属歴による精神的健康の差の検討 12
4.3.3　出動回数による精神的健康の差の検討 13
4.3.4　雇用形態による精神的健康の差の検討 13
4.4　自己開示相手による精神的健康の差の検討 14
4.4.1　自己開示相手（人数）による精神的健康の差の検討 14
4.4.2　自己開示相手（カテゴリー）による精神的健康の差の検討 14
4.5　自己開示相手（カテゴリー）による出動回数の差の検討 15

4.6　自己開示相手（カテゴリー）による自己開示に対する抵抗感および職場の雰囲気の検討......15
4.6.1　自己開示相手（カテゴリー）による自己開示に対する抵抗感の検討......15
4.6.2　自己開示相手（カテゴリー）による職場の雰囲気の検討......16
4.7　属性（階級）による自己開示に対する抵抗感および職場の雰囲気の検討......18
4.7.1　属性（階級）による自己開示に対する抵抗感の検討......18
4.7.2　属性（階級）による職場の雰囲気の検討......18
第５章　考察......20
5.1　属性の検討と精神的健康について......20
5.1.1　対象者の属性の検討......20
5.1.2　属性（惨事経験の有無，階級，所属歴，出動回数，雇用形態）と精神的健康の差の検討......21
5.2　自己開示と精神的健康について......21
5.3　自己開示相手（カテゴリー）と自己開示に対する抵抗感および職場の雰囲気の関連について......22
5.4　属性（階級）と自己開示に対する抵抗感および職場の雰囲気の関連について......23
5.5　総合考察......24
第６章　本研究の限界点と今後の展望......25
謝辞......26

引用文献
資料

第１章　はじめに

惨事ストレスとは，「災害や事故等の悲惨な状況において活動したり，状況を目撃したりした人が，活動・目撃中やその後に起こす外傷性ストレス反応」と定義される（松井，2005)。惨事ストレスを引き起こす可能性は，被災者だけでなく職業的災害救援者にもある。日本では，阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件を契機として，消防職員の精神的健康およびストレスに関する研究が増え（兪・松井，2012)，惨事ストレス対策が実施されている。一方で，職業的災害救援者と同様の業務に従事しているが，職業専門家集団ではなく，ボランティア集団であると言えるのが消防団である。消防団員は消防職員に比べ，外傷性ストレス症状が高いことが報告されている（Ersland，Weisaeth，& Sund，1989）が，消防団員への惨事ストレス対策は確立されていないのが現状である。

惨事ストレスは，岩井・加藤・飛鳥井（1998）が消防職員の惨事ストレス反応の緩和要因として同僚や家族への自己開示が有用であると指摘しており，自己開示が精神的健康を規定する要因の一つであると言える。

また，自己開示は，閉鎖的な職場の雰囲気によって阻害され（大竹，2008)，チームの受容的な雰囲気によって促進する（永野・三城，2015）としており，職場の雰囲気と関連があると言える。

そこで本研究では，消防団の特徴をふまえたうえで，消防団員の惨事ストレスに関する自己開示と精神的健康との関連を検討することを目的とする。

第２章　方法

東京都内 A 市の消防団に所属する消防団員 572 名に一括託送で質問紙を配布し，回答が得られた 172 名（男性 167 名，女性 5 名；平均年齢 45.5 歳，*SD*＝11.9，*range*＝18-72）を分析対象とした。回答期間は，2019 年 10 月 11 日から 10 月 31 日とした。

質問紙は，①人口統計学的変数：性別，年齢，所属する消防団名，階級，業務内容，出動回数，所属歴，同居家族，仕事の雇用形態，②惨事ストレス場面について：惨事ストレス場面への出動経験の有無，内容（8 項目，多重回答形式)，カテゴリー（5 項目，単一回答形式)，時期，③惨事ストレスに関する自己開示：自己開示の有無，開示相手（7 項目，多重回答形式)，④自己開示に対する抵抗感：畑中・福岡・小城・安藤・坂村・松井（2008）より，項目を一部変更し 11 項目，多重回答，⑤職場の雰囲気：畑中（2010）より，項目を一部変更し 16 項目，多重回答，⑥精神的健康：General Health Questionnaire12 項目版（GHQ-12）Goldberg，1972；中川，1981)，12 項目，4 件法で回答を求めた。

分析には，IBM SPSS Statistics 25 を使用し，①惨事経験の有無および自己開示の有無が精神的健康に差があるか否かを検討するために t 検定，②自己開示相手によって精神的健康に差があるかを検討するために，自己開示相手（人数，カテゴリー）を独立変数，精神的健康を従属変数とした一要因の分散分析，③自己開示相手（カテゴリー)，属性（階級）による自己開示に対する抵抗感および職場の雰囲気を検討するために，それぞれ χ^2検定を実施した。

第３章　結果

惨事経験および自己開示の有無による精神的健康の差の検討では，惨事経験，自己開示

の有無ともに GHQ 得点に有意差は見られなかった。
自己開示相手（人数，カテゴリー）による精神的健康の差の検討では，自己開示相手（人数，カテゴリー）を独立変数，精神的健康を従属変数とした一要因の分散分析の結果，有意差は見られなかった。
自己開示相手（カテゴリー），属性（階級）による自己開示に対する抵抗感および職場の雰囲気の検討では，消防団関係者群で「相手の迷惑になるので，話さないほうがよい」の肯定率が低く（$p<.01$），「消防団員の業務が厳しいのは当然であり，いちいち誰かに話すようなことではない」が高かった（$p<.05$）。「上手く話すことができないので，話せずにいる」は，消防団関係者群は肯定率が低く，消防団関係者+家族群は高かった（$p<.05$）。「業務に関わる事柄は，消防団員として誰にも話すべきではない」は，開示なし群の肯定率が高かった $p<.05$）。「団の中に，団員のストレスを気遣う雰囲気がある」は，消防団関係者+家族群では肯定率が低く，消防団関係者+家族+その他群は高かった（$p<.10$）。「団では，何らかのストレスケアが実施されている」は，消防団関係者+家族群では肯定率が低く，開示なし群は高かった（$p<.10$）。「世代の異なる人と話す機会が少ない」は，開示なし群で肯定率が高かった（$p<.10$）。属性（階級）では，職場の雰囲気のみで有意差が見られ，「規律が厳しい」が幹部群で肯定率が高く，団員群は低かった（$p<.05$）。「団では，何らかのストレスケアが実施されている」は，幹部群で肯定率が高く，団員群は低かった（$p<.10$）。

第 4 章　考察

本研究の結果から，消防団員としての意識や態度，立場が自己開示に対する抵抗感や職場の雰囲気に影響を与えていることが示唆された。また，自己開示に対する抵抗感や職場の雰囲気は，開示相手の選択に影響を与えていることが示唆された。そして，消防団員の 8 割以上が惨事経験をした場合に自己開示をすると回答していた。このことから，現在の消防団の雰囲気は良好であることが考えられる。
属性（階級，所属歴，出動回数，雇用形態），自己開示相手（人数，カテゴリー）における GHQ 得点の平均値は 3 点以下であった。このことから，属性（階級，所属歴，出動回数，雇用形態）や自己開示相手（人数，カテゴリー）にかかわらず，現在の消防団員の精神的健康度は，一般健常者と同程度であることが考えられる。
しかしながら，自己開示相手（人数，カテゴリー）と精神的健康は関連がないことが明らかとなり，消防団員の惨事ストレスに関する自己開示と精神的健康に直線的な関連がないことを示した。このことから，消防団員の惨事ストレスに関する自己開示は，惨事経験の有無にかかわらず，現在の消防団員の精神的健康に影響を与えないことが考えられる。

第 5 章　今後の課題

本研究により，消防団員の惨事ストレスに関する自己開示は，惨事経験の有無にかかわらず，現在の消防団員の精神的健康に影響を与えないことが示唆された。しかしながら，今回の調査では，惨事経験無し群が大半であり，惨事経験有り群とサンプルサイズに大きく差があった。そのため，実際に惨事経験をした場合に自己開示が有用であるかについては検討が必要である。

引用文献

明石加代・藤井千太・加藤寛（2008）．災害・大事故被災集団への早期介入――「サイコロジカル・ファーストエイド実施の手引き」日本語版作成の試み――　心的トラウマ研究，(4)，17-26.

Berger，W.，Coutinho，E. S. F.，Figueira，I.，Marques-Portella，C.，Luz，M. P.，Neylan，T. C.，Marmar，C. R.，& Mendlowicz，M. V.（2011）．Rescuers at risk：A systematic review and meta-regression analysis of the worldwide current prevalence and correlates of PTSD in rescue workers． *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*，*47*，1001-1011.

大規模災害時に係るストレス対策研究会（2013）．大規模災害時等に係る惨事ストレス対策研究会報告書　総務省消防庁

Ersland，S.，Weisaeth，L.，& Sund，A.（1989）．The stress upon rescuers involved in an oil rig disaster, "Alexander L. Kielland"1980. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, *80*（suppl 355），38-49.

Goldberg, D. P.（1972）. The detection of psychiatric illness by questionnaire. *Maudsley Monographs*，21．London: Oxford University Press．（ゴールドバーグ D．P．中川泰彬（訳編著）（1981）．質問紙法による精神・神経症症状の把握の理論と臨床応用（第一部）　国立精神衛生研究所

畑中美穂（2011）．消防職員の惨事ストレスに関する自己開示――同僚および家族に対する開示と精神的健康との関連――　名城大学総合研究所総合学術研究論文集，*10*, 75-82.

畑中美穂・福岡欣治・小城英子・安藤清志・坂村英典・松井豊（2008）．ジャーナリストの惨事ストレス（10）自己開示と精神的健康との関連　日本心理学会第 72 回大会発表論文集，251.

畑中美穂・松井豊（2003）．抑制的会話態度及びソーシャルサポートが消防職員の精神的健康に及ぼす影響 日本心理学会第 67 回大会論文集，172.

畑中美穂・松井豊・丸山晋・小西聖子・高塚雄介（2004）．日本の消防職員における外傷性ストレス　トラウマティック・ストレス，*2*，67-75.

畑中美穂・松井豊・兪善英（2011）．惨事に出場した消防団員の急性ストレス反応 筑波大学心理学研究，*42*，43-50.

福西勇夫（1990）．日本版 General Health Questionnaire（GHQ）の cut-off point　心理臨床，*3*（3），228-234.

伊藤守・小泉秀樹・三本松政之・似田貝香門・橋本和孝・長谷部弘・日髙昭夫・吉原直樹（編）（2017）．コミュニティ事典　春風社

岩井圭司・加藤寛・飛鳥井望（1998）．災害救援者の PTSD――阪神・淡路大震災被災地における消防士の面接調査から――　精神科治療学，*13*，8，971-979.

加藤友啓・君塚聡子・日高一誠・下畑行盛・落合博志・松井豊（2006）．惨事ストレス対策に関する調査検証　消防技術安全所報（東京消防庁消防技術安全所），*43*，77-89.

公益財団法人日本消防協会（2008）．消防団の統計データ　Retrieved from http://www.nissho.or.jp/contents/static/syouboudan/toukei-data.html（2019 年 10

月 1 日）
松井豊（2005）．惨事ストレスとは　惨事ストレスへのケア　ブレーン出版
Mitchell, J. T. , Everly, G. S.（2002）. *Critical Incident Stress Debriefing : An Operations Manual for CISD, Defusing and Other Group Crisis Intervention Services, Third Edition.*
（高橋祥友訳，緊急事態ストレス・PTSD 対応マニュアル――危機介入技法としてのディブリーフィング――　金剛出版）
永野明子・三城大介（2015）．障害者就労施設の支援者における自己開示グループワークの影響――就労継続支援Ａ型事業所での試み――　応用障害心理学研究，*14*, 39-53.
大竹直子（2008）．教師の自己成長を促すチームワークづくり　土台は弱音を吐ける人間関係　教育と医学　慶応義塾大学出版会，*56*（2），176-183.
Rose SC，Bisson J，Churchill R．& Wessely S（2002）．Psychological debriefing for preventing post traumatic stress disorder（PTSD）（Review）．Retrieved from https://www.cochranelibrary.com/cdsr/doi/10.1002/14651858.CD000560/pdf/CDSR/CD000560/CD000560_abstract.pdf（2020 年 1 月 27 日）
総務省（2014）．安全・安心の基礎知識　ダイヤモンド社
総務省消防庁（公開日不明）．消防団の活動って？　Retrieved from https://www.fdma.go.jp/relocation/syobodan/about/（2019 年 6 月 3 日）
Stephen，C．(1997)．Debriefing，social support and PTSD in the New Zealand police: Teing a multidimensional model of organizational traumatic stress．*Australalasian Jounal of Disaster and Trauma Studies*，*1*（1）．
消防職員の現場活動に係るストレス対策研究会　(2003)．消防職員の惨事ストレスの実態と対策のあり方について 地方公務員安全衛生推進協会
兪善英・松井豊（2012）．配偶者に対する消防職員のストレス開示抑制態度が精神的健康へ及ぼす影響　心理学研究，*83*, 5，440-449.